

見沼自然公園の 井澤弥惣兵衛為永の銅像

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

大 宮の盆栽町を後にして、平成十七年に井澤弥惣兵衛為永の銅像が建てられたという見沼自然公園へと向かうことにした。地図を見ると、途中の七里総合公園を抜けてから見沼代用水をたどるのが、景色が良いように思われる。しかも見沼代用水は、為永の手による灌漑水路なので、見学がてらちようどよい。

ところで徒歩の旅は、意外と時間に追われてしまう。一〇キロそこらならともかく、三〇キロともなれば、のんびりしていたら日が暮れる。速足で、ひたすら急ぐ。

そうして到着した七里総合公園は、見沼代用水と加田屋川に挟まれた細長い自然公園なのだが、しっかり整備されていて味気ない。それよりも、公園から南にのびる加田屋川沿いの砂利道のほうが、未舗装に近く、人も歩いていないので楽しそうだ。見沼代用水沿いを歩こうかと思ったが、それは左手に眺めながら、しばらくはこの道を行くことにした。

田園風景の中で、黙々と独り歩きを楽しんでいると、行く手を道路工事のトラ柵にはばまれた。気分がよかったのに、ついていない。しかたなく見沼代用水沿いの遊歩道に歩みを移せば、いつのまにか見沼自然公園は目と鼻の先にあり、北側から公園に入

ると芝生の広場に井澤為永の銅像は建っていた。

『見沼代用水沿革史』によると井澤氏は、弓馬と笙の歌手と伝わる新羅三郎源義光にはじまり、現在の和歌山県海南市に土着して井澤氏を名乗った。為永の生年は、寛文三（一六六三）年と承応三（一六五四）年の二説があり、どちらが正しいか明らかではない。幼少から算術が得意で、天狗から秘術を授かったと噂されるほど土木技術に才能を発揮したので、勘定方として紀州藩に登用され、以後三十年を藩の土木事業に尽くすこととなる。

そのまま紀州で一生を終えるはずの為永だったが、第五代藩主徳川吉宗が八代將軍に就任したことで一変する。吉宗は「享保の改革」の柱である新田開発政策を遂行するため、故郷紀州の為永を抜擢し、紀州流の土木技術をもってこれにあたることとした。時に享保八（一七二三）年。為永の生年は寛文三年なら六十歳、承応三年なら六十九歳という、いずれにしてもかなりの高齢にもかかわらず、元文三（一七三三）年で亡くなるまで、数々の幕府の土木事業を行った。

見沼自然公園から南へ少し歩くと、万年寺という寺があり、そこには為永の頌徳碑が建てられている。実はこれは見沼代用水が元荒川をくぐる柴山伏

越（埼玉県白岡市柴山）の堤畔に、明和四（一七六七）年に建てられた為永の墓石を模したもので、文化十四（一八一七）年に建てられた。碑の表面には墓石と同じく為永の没年や戒名などが刻まれており、裏面の建立由来によると柴山で為永の墓石を建てたところ、水難も無く、作物も豊かに稔ったというので、あやかっけて建碑したのだという。天狗と通じたとされる為永の霊験はあらたかだったようだ。



井澤為永の銅像

[交通] 大宮盆栽町から見沼自然公園まで徒歩2～3時間